MINAMI KYUSYU NO JOKAKU
南九州の城郭
第16号
南九州城郭談話会報
平成13（2001）年1月25日発行

肥後八代城考
―曲輪配置を中心として―

高田　徹

1　はじめに

熊本県八代市松江町の八代城は，元和５年地震によって壊滅的な打撃を受けた麦島城（同市古城町）にかわって，翌６年より肥後国主加藤忠広によって新規築城された。以後，八代城は明治に至るまで肥後国内では本城にあたる熊本城に対する支城として存続した。元和一国一城令後にも係わらず，支城にあたる八代城が新規築城された理由については薩摩の島津氏に対する備え，或いは異国船に対する警備目的等にあったと説明されることが多い（註1）。

さて八代城は，現在も本丸周辺に石垣や堀等の遺構を止めている。従来，その縄張りについては天守台付近の構造が尾張名古屋城に類似している点，全体としてひずみ，枡形，蔀，かざしが発達している点，二之丸以下の作事が軽微な点等が指摘されている（註2）。本稿では，こうした評価を再確認する意味で，筆者なりに八代城の縄張り，特に曲輪配置に注目して考えてみたい。

2　曲輪の配置

八代城は，現在本丸周辺に遺構を残すのみであるが，かつての曲輪の配置状況は『正保城絵図』等によっておよそ把握できる。ここでは便宜的に『復元大系日本の城』（註3）所収絵図のトレース図（第１図参照）によってその構成を確認したい。Ⅰ（本丸）を中心に，Ⅱ（二之丸）・Ⅲ（北之丸）・Ⅳ（三之丸）・Ⅴ（出丸）の曲輪が回字状に取り巻くのが基本構成である（更に外側に外郭部が存在した）。これらの塁線は随所で折れ曲がり，一見雑然とした印象を受ける。但し，子細にみるとこれらの曲輪配置は極めて整然としていることに気付く。即ち，本丸虎口は東側のａ，北側のｂの２ヶ所である。ａ・ｂとも櫓門と高麗門がセットとなった枡形であり，外側の門の左手にはいずれも平櫓を置く点でも共通する。ａの外側にあるのがⅡ，ｂの外側にあるのがⅢ，更にⅡ・Ⅲからそれぞれ外に出た部分にあるのがⅣ・Ⅴである。Ⅳ・ⅤではⅠからⅡ・Ⅲを経由して分化された通路が一旦集約され，更に２方向に向かって通路が分化される。形態こそいびつであるが，構造的には左右対称状にⅠ以下の曲輪が配されていると言える。

次に，各曲輪内の普請・作事状況にも注意すると，左右対称状の縄張りの中にも，軍事的な階層性が設定されていることが理解される。即ち，Ⅰは北西隅に天守台ｃを置き，ｄに三層櫓を置くなど，ほぼ塁線コーナーに櫓を構え，それらの間を土塀や多聞櫓で結んでいる。当

然ながらⅠは城域中で唯一完結する曲輪で，最も軍事的機能が強い。虎口のうち，ａが大手に相当し，恒常的に使用されたと考えられる。一方のｂは小さく，絵図には「うつミ（埋）御門」と記されるように，恒常的に使用されなかったと思われる。ａの対岸にあるⅡは塁線コーナーにほぼ櫓を構えているが，櫓の間に土塀等が設けられた形跡はない。一方，ｂの対岸にあるⅢは石垣部分が少なく，櫓・土塀もみられず，塁線上に僅かに柵列が並んでいたようである。この一事をしても，Ⅰに次いでⅢよりもⅡが軍事的に優位に位置づけられていたことは明らかである。

ところで，加藤氏改易の後，寛永９年に八代に入城する細川忠興は，本丸Ⅰに４男立孝を入れ，自らはⅢに居所を置いた。このことは，Ⅲが軍事上はⅡよりも低い位置づけがなされながら，先の曲輪の配置関係で言えばⅡに比した位置にあったことを雄弁にかたると言えよう。又，ｂが普段は使用されず，ａが恒常的に使われていたとすれば，外側の曲輪からでは敢えてⅢ内部を通過せずともⅠに到達することが可能となる。このような通路の設定がなされた場合，Ⅲは城内で奥まった位置にある，と言うことも出来よう。

以上のように考えるなら，ⅡとⅢの構造差は，軍事的な機能差と共に城域における裏・表の使い分けに基づいて設定されているとみることも出来よう。先に述べたように，Ⅲは石垣のない部分もあり，これはしばしば八代城が未完成であったとする根拠とされる。勿論，その可能性も否定しないが，一方で逆に当初からそのような曲輪配置と機能差を念頭においた上での構造であった可能性も視野に入れるべきではないだろうか。

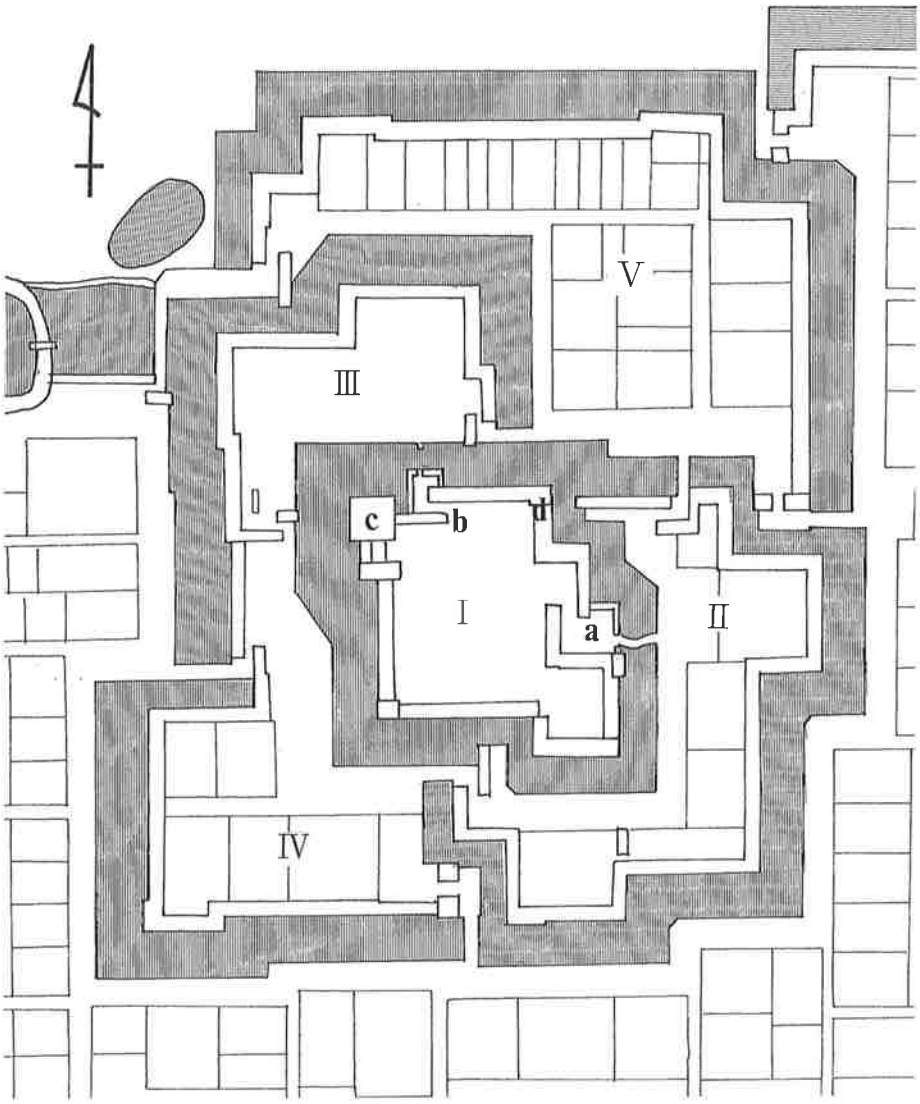
さて，これらの曲輪は本丸を中心に，それぞれが横方向に連なって回字状になっている。その為，本丸の周囲は基本的に一重の曲輪によって囲まれているだけである。この点，塁線の形態は複雑であるが，全体の曲輪配置はシンプルになっている（但し，天守は本丸の中でも特に意識された存在であったのか，そこではⅣとの間を分ける堀幅が意識的に広げられている）。このような曲輪配置は，規模や形態の差こそあれ，徳川期大坂城にも類似する縄張りである。

Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの各間はⅢとⅣとの間を除いて，いずれも堀で区画されている。これらの堀にかかる土橋はいずれもⅠ堀際に設けられている。更に，Ⅱ・Ⅳ・Ⅴの曲輪内部は外側塁線際に侍屋敷等の諸施設が密集して配置されている。その為，隣り合う曲輪の虎口と虎口を結ぶ通路は必然的に本丸堀際に集約されている。このような堀の配置による本丸側への通路集中化は尾張名古屋城でもみられる。但し，八代城ではⅡとⅣ，ⅡとⅤを分ける堀部分にはそれぞれ２つの虎口が連続するように設けられており，一層防備に厳重な感がある。

尚，八代城ではⅠ以外の虎口部分では，土橋を挟んで向かい合う大半の堀が一方に対して一方がＬ字状に城内側に食い込む形となっている。このため，土橋部分の距離が長くなり，城内側に大きく引き込んだ部分に城門が構えられる形となる。このような虎口は，堀の形態に違いはあるものの，熊本城でも共通してみることができる（註４）。

３　まとめ

先に述べたように，八代城は本丸を中心に強い一貫性と対称性を持ち，且つ表裏の使い分けを意識した可能性のある縄張りを，シンプル且つコンパクトにまとめている。このような縄張りが造られたのは，地形の影響を受けにくい平地部での築城によることも大きいであろうが，近世初頭における発展した築城術を踏まえていることも確かであろう。プラン的には名古屋城や徳川期大坂城にも類似する部分を認めることが出来た。このようなプランの採用は，天下普請等を介して体得した築城技術を加藤氏が自らの技術（例えば虎口



第1図　八代城曲輪配置図

部分等）も加味しながら，築城に及んだ結果である可能性も考えられよう。或いは，想像を逞しくするのなら幕府からの関与や援助を受けつつ八代築城がなされたため，かかる縄張りが造り出された可能性もあるのではないか。八代城が江戸期を通じて加藤・細川領の支城として存続した点は紛れもない事実である。シンプル且つコンパクトな縄張りについてはその点を踏まえての縄張り評価も重要となろうが，一方で４層の天守が聳えることに代表される作事面や先述した縄張りには一大名領内の本・支城関係に止まらない機能・役割が期待されていたようにも思われる。

以上，八代城の曲輪配置について思いつく点を述べた。ここで述べたのは，曲輪配置から読みとった１つの可能性の指摘に過ぎない。今後，八代築城時の加藤氏の対幕府関係，麦島城との構造比較等も含め，単なる類似性の指摘のみに止まらない検討を進めていくことが必要となろう。

註

1　竹内理三編『角川日本地名大辞典 43 熊本県』（角川書店，平成３年）等

2　藤崎定久『日本の古城』3（新人物往来社，昭和 45 年），阿蘇品保夫他『日本城郭大系』18（新人物往来社，昭和 55 年）

3　坪井清足他監修『復元大系日本の城』8（ぎょうせい，平成４年）

4　拙稿「虎口の機能・評価に関する問題について」（織豊期城郭研究会『織豊城郭』6，平成 11 年）

城郭情報

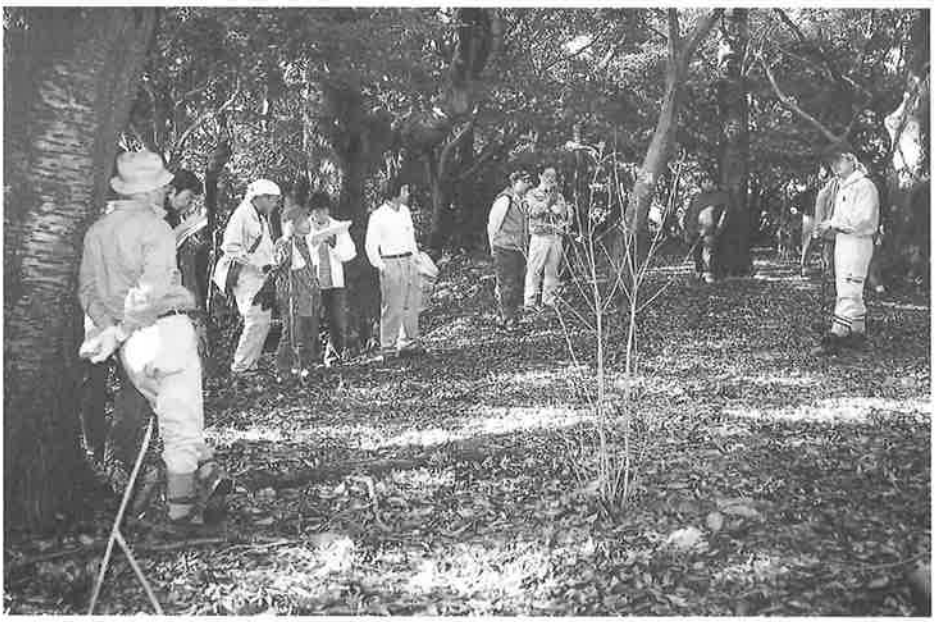
北部九州近世城郭研究会結成のお知らせ

北部九州中近世城郭研究会　山　崎　龍　雄

去る11月11日(土)と12日(日)の2日間，福岡県前原市で北部九州中近世城郭研究会の第1回大会が行われました。この研究会は北九州市の中村修身さん，佐賀県名護屋城博物館の宮武正登さん，鳥栖市の石橋新次さん，久留米市の近沢康治さん，前原市の瓜生秀文さんらと筆者の呼びかけで結成されたものです。一応熊本県を含む北部九州各県と山口県迄の地域を視野に入れています。昨年から活動を始め，同年7月には福岡市の博物館で勉強会，11月には鳥栖市の勝尾城跡の現地見学，今年4月には犀川町の宇都宮氏の館跡の現地見学会などを行って来ましたが，今回初めて全国に広く呼びかけて，開催したものです。

今回は前原市に所在する国人領主の原田氏の本城，高祖城にちなんで「北部九州の在地領主と城館」というテーマで行いました。初日の11日は高祖城の現地見学会で約30名が参加し，麓にある原田氏の館跡推定地と，山上の高祖城を見学しました。2日目の12日は午前中に7本の研究報告，午後はそれらを受けて「石垣と瓦」・「石垣と縄張り」・「城下町と館」の問題で，約2時間のシンポジウムを行いました。シンポジウムでは白熱した議論・討議が交わされました。12日は地元を中心に遠くは山口・大分・佐賀県などから80名近い参加がありました。来年の第2回では今回提示された諸問題について，更に検討を深めていくつもりです。また今大会の成果は研究誌として刊行する予定です。

北部九州中近世城郭研究会はまだ誕生したばかりで，いわば南九州城郭談話会の弟のような存在です。当研究会のこれからの発展の為に，協力と指導・助言をいただけたらと思います。またお互いに情報交換や研究会の相互交流も出来ればと考えます。北と南，戦国時代には色々ありましたが，21世紀には共同で九州における城館の研究ができればと思います。また今後，当研究会への参加をお待ちしています。　(2000年12月3日)



高祖城跡で行われた見学会

調査速報

知覧城本丸跡の発掘調査

―虎口周辺を中心として―

知覧町教育委員会

1　はじめに

川辺郡知覧町永里に所在する知覧城跡（国指定史跡）では，平成10年度から保存整備に伴う事前の発掘調査が実施されている。今年度は本丸跡虎口付近約120㎡と今城跡約15㎡の調査を行った。本稿では，本丸跡の調査についての概要を記す。

2　本丸跡の発掘調査

本丸の内枡形虎口を経て，曲輪に至ると正面に昭和9年に建立された洗いだしの石碑がある。この石碑のある虎口周辺約120㎡を発掘調査した。

遺物・遺構の出土する深さの平均は約50～60㎝である。主な遺構には堀立柱建物跡の柱穴約50基，土塁下の溝と石列，深さ2.6ｍ，幅1.0ｍの円形土坑，柵列等々である。遺物には，15世紀～16世紀後半の中国製陶磁器（青磁・染付など），火鉢，かわらけ，鉄くぎ，鍛冶滓，青銅製品などである。

3　出土遺構から推察する曲輪の状況

現状の本丸曲輪面に至る出入り口には，Ｌ字に曲がった内桝形虎口の空間がみられる。この虎口をぬけ曲輪（平坦）面に至ると門があり，そこをくぐると正面に板塀・柵などの障害物があり，屋敷へスムーズに入ることができないように工夫がなされている。また，土塁は現在の姿よりさらに大きく，土塁の内側には排水のための溝が設けてあり，土砂流失のための石列が配置されていた。

4　むすび

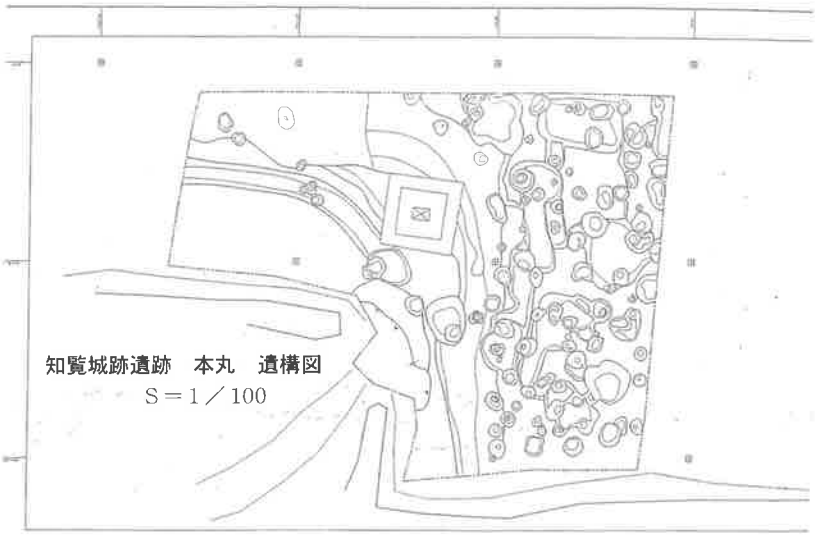
些か粗い説明となったが，出土遺構から想定される本丸虎口周辺曲輪面の状況である。

表面観察できる土塁や堀などの防御施設にとどまらず本丸跡約3,400㎡の曲輪面に入ってなおも木や竹などで仕切られた何らかの防御施設が存在していたのであろうか。

今回のこのような遺構の発見は知覧城跡の在り方を考える上で示唆に富む。

山城跡の発掘調査は，それ自体が遺構そのものなので，発掘によって遺構損傷しているようで恐くなることがよくある。多くのご意見・ご教示をいただければ幸いである。

※　平成13年度は，蔵之城跡曲輪面の全面発掘調査を実施する予定。　（文責：上田　耕）



◆◆ 第16回見学会・例会報告 ◆◆

出　口　浩　二

見　学　会

秋晴れの平成12年11月12日，西都原古墳群のある町として名高い宮崎県西都市の公民館に10時集合，開会式を行い，国指定史跡都於郡城の見学に出発した。この日は高屋山稜祭とも重なっており，子どもたちの武者行列が次々に繰り込んで，都於郡城は異様な熱気に包まれていた。祭りの参加者約3,000人が場内にひしめき，弓道など様々な催物もあり，案内者である西都市教育委員会の蓑方氏も会員をまとめて誘導するのに苦労していた。

都於郡城は南北朝時代，建武2年(1335)に築城のあと，日向中央部に勢力をほこった伊東氏の居城として栄えたという。永正元年(1504)火災，以後伊東氏は佐土原城や宮崎城を拠点とすることも多かったらしい。伊東氏没落後は島津氏が入り，近世には廃城となっている。

城は北へ向かう三財川の右岸の台地上あり，標高約100m，周りを急崖に囲まれた天険の名城である。三財川を天然の外堀として取り込んでいる。中心となる五城郭「本丸」「二ノ丸」「三ノ丸」「西ノ城」「奥ノ城」からなり，南北260m，東西400mにも及んでいる。

この5つの曲輪を中心として，各種の付属の曲輪や空堀，土塁などを配置して壮大な一大城郭を形成している。

樹木を除き，全体を芝生で覆った開放的な展望のすばらしい公園型の城跡として整備されている。

例　　会

午後1時から桒畑光博氏の司会で西都市公民館で開催され，下記の発表があった。

1．若山浩章　14～15世紀の都於郡城

城の最終段階である縄張り図をもって城の位置づけを行うことへの矛盾，すなわち最初に出来た城から様々な歴史的変遷を経て(造営，縮小，変更など)，現在の城跡となっていることへの視点を重視すること。

2．吉本正典　「栫」地名考

囲繞施設としての栫－囲の字名の意味するところについて

3．各地の城郭調査

福田泰典　宮崎県の城郭調査

橋口　亘　鹿児島県の城郭調査

最後に三木会長が総括を行い全日程を終了した。参加者，見学会45名，例会60名。

都於郡城三ノ丸にて（平成12年11月12日　出口　写）

城郭研究

えびの市の球磨陣跡（前編）

鶴　嶋　俊　彦

1　はじめに

加久藤盆地北側の標高750メートル前後の溶岩台地は，熊本県人吉市と宮崎県えびの市の県境に位置し，小起伏の平坦地が続く準平原地形の高原である。高原のほとんどは現在，えびの市域の大字坂元字高野地区であり，県境は高原の北縁を東西に走っている。

球磨陣跡は高原の南端，すなわち加久藤盆地を見下ろすなだらかな丘陵頂部に位置する遺跡である。この球磨陣跡の史料上での初見はおそらくは元禄11年の奥付をもつ「飯野他領境并内場境麓廻縄引帳」（註1）で，同じく高野地区の丘陵上に位置する「薩摩陣」とともに「求麻陣」が地名としてのみ見える。両陣は江戸後期の編纂になる『三国名勝図会』（註2）でも簡単に触れられており，それぞれの陣が相良氏と島津氏の手によるものとしている。

一方，これらの陣跡について扱った解説・研究は，管見では昭和24・25年頃に書き留められた『郷土拾塵録』（註3），昭和41年刊行の『飯野郷土史』（註4），平成6年刊行の『えびの市史上巻』（註5）があり，最近では平成11年刊行の『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ解説編』（以下，『城館跡調査報告書』と略す。註6）がある。『えびの市史』では簡単な略図が初めて公開され，『城館跡調査報告書』では縄張り図（略測図）を作成し紹介している。

『三国名勝図会』の言うように，相良氏が築いた陣であれば，中世史料での相良氏の動きから真幸への覇権・支配を強めた永禄年間に戦術的な城として築かれた可能性があり，築城年代を推定できる城郭として，また相良氏の築城法をうかがうことが可能な城郭の一つとして重要である。すでに縄張り図も公表されており，「屋上屋を架す」の例もあるが，近接する薩摩陣についても触れながら現地の遺構に関する私見を述べたい。

2　史料上の「球磨陣」

先ず近世史料にみえる球磨陣について整理しておく。

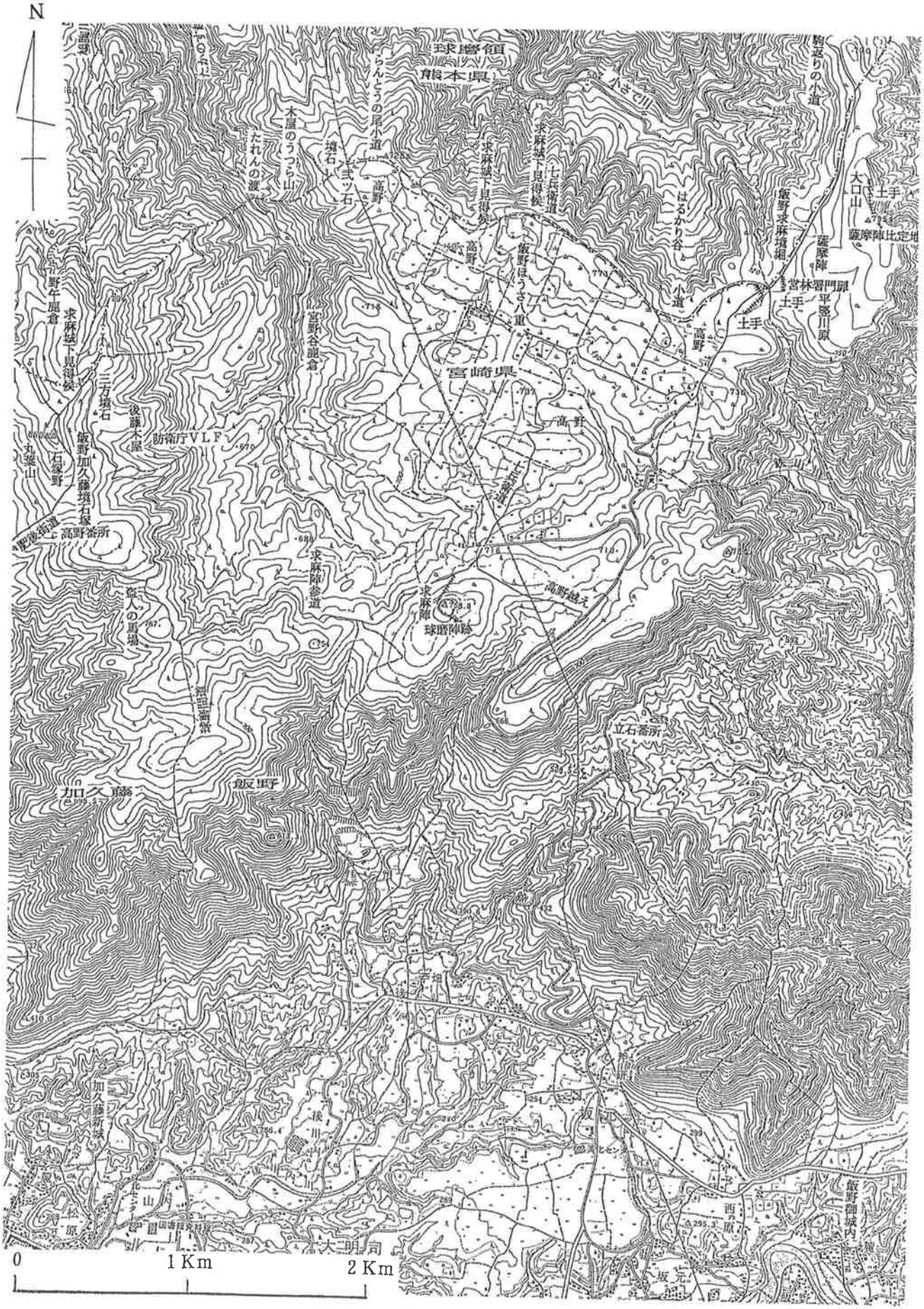
【史料1】「飯野他領境并内場境麓廻縄引帳」

本史料は元禄度国絵図の作成に伴い飯野外城（郷）の四囲境などを明示した元禄11年作成の文書で，一間を六尺三寸で縄を張り計測し，測量地点毎に方位，間数，地目，備考の順に箇条書きされ，備考には小道，村名，傍示となる石や木，山や野の地名等が記載されている。計測は球磨と飯野，加久藤との三方境（現在の九州電力国見山無線中継所の東方300ｍ，防衛庁ＶＬＦ施設敷地西北部）を始発点に東に進む。記載内容を基に現地比定すると，測量地点の詳細な比定は難しいが現在の県境が当時の飯野と球磨の境であることが略了承される。この史料中には以下のように球磨陣に係わる記載がある。（カッコ内は筆者の註。）

①18条「卯之方　三百四拾間　右（野）同但縄頭ニ七兵衛道と申道御座候求麻領山江二町行先ハ求麻陣拾八町道之程御座候同所ヨリ亥之方ニ當テハ求麻領田代村道程壱里半程同戌之方ニ當テ求广城下見左ハ求广領山右ハ飯野ほうさ八重」

②25条「丑之方　弐拾九間　此間通山　但縄頭野平竪川原ト申候此山の内ニ飯野求麻境境堀御座候」

③27条「同（丑）之方　弐拾間　右（野）同但此間よ里巳之方壱町程ニ薩摩陣御座



第1図　球磨陣跡位置図
（縦文字は「飯野他領境并内場境麓廻縄引帳」に出る地名）

候薩摩陣よ里求广陣之間未申ニ當。弐拾町程御座候」

【史料２】『三国名勝図会』

天保14年の編集になる地誌書で，各郷別に旧蹟として中世の城郭をあげている。すなわち，日向國諸縣郡飯野郷の段で，薩摩壘と球麻壘がみえる。球磨壘は『古城合記』からの引用である。

①「薩摩壘　地頭館より一里三十町に近し，原田村にあり松齢公飯野に在し時，球麻相良氏侵寇の聞えありて，壘を構へ，守兵を置カるといふ，壘趾岡阜なり，俗に薩摩陣といふ」

②「球麻壘　大明司村にあり，相良氏の故壘なりといふ」

3　球磨陣跡と薩摩陣跡の比定地

『郷土拾塵録』では，「球磨陣」を高野原の南端の真幸谷が眼下に展開する高台にあり，方四十間許の古き堡塁があり，旧飯野越はその北側近くにあり，それを距てて番所があったという伝承を引用する。また，薩摩陣について球磨陣跡の北方にあるという話を記すが，敵境に近いのが薩摩陣であることを疑問としている。図示はされていない。

『飯野郷土史』は「薩摩陣阯」として，「飯野町大字坂元，飯野小学校を西北に距る五キロメートル肥後境の台地の北部に薩摩陣と称する古塁がある。島津義弘飯野城在城のとき，相良氏に備えて築いたものと伝わる。またこれと相対して四百余メートルのところに球磨陣址がある。相良兵の屯した所と云う」とする。図示はない。

『えびの市史上巻』は付図で球磨陣を標高758.8メートルの山丘頂部三角点付近に，薩摩陣を 795.9メートルの三角点付近に図示している。球磨陣は岡の上に楕円形の土塁が遺存し，土塁の内径は70～80メートルで，中央の径20メートル周囲ほどを残して周辺を掘削した土で，高さ３～４メートル，下幅8.5～11メートル，上面幅２～３メートルの土塁を築き，北東に出入り口を設けているとしている。この陣跡を元亀３年（1572）正月の木崎原の戦いの際に伊東氏の援軍として駆けつけた相良軍が陣を張った場所としている。一方，薩摩陣については島津義弘が飯野城にあるとき，球磨の相良氏に備えて築いたものとするが，球磨陣にあるような構築物は残っていないとしている。

『城館跡調査報告書』は『三国名勝図会』を引用し，陣の位置は『えびの市史上巻』の説を踏襲している。球磨陣について「北東，南東，北西の３か所に出入口を設けている。北西の出入口より北東に拓く20メートル（筆者註，200 メートルの誤り），さらに南東の出入口より南東にへ約 200メートルの土手が延びているが，これも土塁であるかどうか，定かでない。」としている。一方，薩摩陣については「現在，付近には長さ1300メートルの土手があり，国営牧場を造る際に築かれたものとされるが，往時の土塁を利用したものかどうか，現段階では不明である。」としている。

（以下，次号へ）

註

1　後掲（註５）の『えびの市史』上巻，巻末「資料編」に拠った。

2　原口虎雄監修『三国名勝図會』第四巻　青潮社 1982。

3　宕雪庵啓堂　『郷土拾塵録』 自家本　1949～1950頃。

4　『飯野郷土史』 飯野町 1966。

5　えびの市郷土史編さん委員会『えびの市史』上巻 宮崎県えびの市 1994。

6『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』Ⅱ詳説編 1999。

事務局だより

募　集！

◎機関誌『南九州城郭研究』第３号の原稿
論文，研究ノート，史料紹介等

【新入会員】　（1月15日現在）

高浜　確也　　名和　達夫

出版物のご案内

機関誌『南九州城郭研究』第2号

平成12年11月刊行！

購入希望の方は，下記手続きをお願いします。

・最寄りの郵便局において代金1,500円（非会員は1,800円）を**「口座番号01760-3-84609，南九州城郭談話会」**までお払い込み下さい。確認次第，第2号を送付します。なお，送料は当方で負担します。

・問合先

〒899-5421

鹿児島県姶良郡姶良町東餅田498番地

姶良町歴史民俗資料館　気付

下　鶴　　弘

TEL 0995-65-1553

FAX 0995-66-5820

第17回 見学会・例会案内

日　時　平成13年5月26日(土)
午後2時～5時

集合場所　鹿児島県歴史資料センター
黎明館講堂（鶴丸城跡）

交通案内　・JR西鹿児島駅より車で約7分
・市営バス，市電朝日通り電停より徒歩約10分

会　順　(1) 研究発表会
14:00　開　会
「中世・近世城郭調査の現状」
北部九州,熊本,宮崎,鹿児島他
18:00　情報交換会
(2) 見学会
翌27日(日)の午前中に
鹿児島市内の城郭を見学の予定

事務局便り

◎機関誌『南九州城郭研究』第2号

A4版　104頁

・三木　靖「発刊に際して」　P 1

論文

・鶴嶋俊彦「中世八代の城郭と城下」　P 3
・高田　徹「泗川倭城について」　P 39

研究ノート

・若山浩章「都於郡城覚書」　P 51
・川元茂信「南郷城と桑波田氏」　P 61
・上田　耕「南九州の拠点城郭の一例」　P 73

史料紹介

・五味克夫「菱刈本城城主考（補正）」　P 85
・三木　靖「中世城郭と住民」　P 89

編集後記

◆第16号をお届けします。今号には，高田徹・鶴嶋俊彦の両氏からの熱意のこもった論考を掲載しました。いつもながら両氏の精力的な調査には目を瞠ります。原稿収集で，いつも頭を悩ませている編集子としては，感謝の限りです。また，上田耕氏からも知覧城跡の調査速報を頂きました。有り難うございました。

◆北部九州で熱心に城郭を調査研究されていた方々を中心に「北部九州中近世城郭研究会」が発足したとのこと，大変嬉しく思うと同時に心強く感じました。今後，当談話会ともぜひ交流をお願いし，ともに九州の城郭を解明して行かんことを。

◆毎号のように，見学会・例会報告を執筆して頂いている出口浩先生がいよいよ停年となります。長い間，お疲れ様でした。鹿児島市教育委員会を離れることになっても，さらに一層，当会のために御指導をお願いします。

◆次号の会報発行は，5月上旬の予定です。原稿は下記まで。　(Shige)

重久淳一　〒899-5106 姶良郡隼人町内山田1138-5

南九州の城郭　第16号

発行所　鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内 上田耕気付
南九州城郭談話会
（振替口座 02040－6－7850）

発行者　三　木　　靖

編集者　重　久　淳　一

印刷所　㈱ト ラ イ 社

入会金500円　年会費2,000円